

乾燥地を拓く

鳥取大学ITPだより

2

野菜や果物が豊富

土から学ぶシリア

「乾燥地＝砂漠」、そんなイメージ

でこの地、シリアに到着したが出迎えてくれたのは、しとしと降る雨だった。思わず「これは乾燥地はず？」と思った。年間降水量が日本に比べて約6分の1のシリアでは、雨は人々や植物にとって貴重な資源である。めったに降らない雨からの歓迎を受けてこの地に暮らし始め、今、3カ月が過ぎた。

同じシリア国内でも、分布する土壌の種類は異なる。東部は、まるで砂漠のような景観が広がる。その中に、植物が茂っている所がちらりこちらに見られる。「ここは他の場所よりも土の中の水分が多いんだよ」と植物が教えてくれているようだ。自然が trickery だすそんな風景に、関心と感動をおぼ



野菜売り場のジャガイモ。日本では見たことのない、手の平よりもずっと大きいジャガイモが、山積みで売られている

える。

北部は、鉄分を含んだ赤褐色の土壌が広がる。ここでは道路沿いに小さな野菜売り場がいくつも並んでいて、自分の手より大きなジャガ芋や、腕をいっぱいに広げたほどに大きく育ったキャベツが売られている。驚くほど大きく育ったこれらの野菜たちは、この赤褐色の土から育ったものだ。土壌学を専門に学ぶ私にとって、とても興味深い。

シリアは乾燥地とはいっても、スーパーや小売店には、さまざまな種類の野菜や果物が箱いっぱい積み上げられて売られている。意外にも、食料は豊富にそろっているのだ。肥沃な土壌のたまものを目の当たりにして、びっ

くりする。

そして、南部のヨルダン、イスラエル、シリアの国境付近に位置するゴラン高原にも、肥沃な土壌が広がっている。この地域は40年前、3カ国による激しい戦争が起り、それ以来国連に管理され、今なお警戒されている地域である。この土地をめぐる争いが起る理由、その一つが、ゴラン高原に広がる肥沃な土だという。土壌も貴重な資源なのだ。

シリアに立つ私の足もとは、砂漠化の危機が心配されている環境問題の現場だ。一方、私たちが日々欠かすことのできない食料、ひいては文化や習慣を生み出してくれる場所でもある。資源としての土壌の重要性を日々の体験から実感している。

(鳥取大学大学院農学専攻科学生・下中香代子)

(月1回掲載)